
いわく付き物件の幽霊

狂風師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いわく付き物件の幽霊

【Nコード】

N4233S

【作者名】

狂風師

【あらすじ】

いわく付き物件に住む主人公。しかしその家には、幽霊が住み着いていた。姿の見えない幽霊とロリコン主人公との甘い恋愛生活はどうぞ。 5/22追記（一応）完結しました。あとは作者の執筆意欲があれば続きを書くかもしれません。

出会い（前書き）

この小説を読むにあたっての諸注意。

『細かいことを気にしたら負け犬』

以上！

出会い

「もーいいや！ 寝る！ おやすみ！」

明日提出の課題。けっきょく終わらせないまま、俺は眠りについた。

なるようになるさ。それが俺のポリシー。

朝。目覚ましの無機質でイライラする音に起こされる。机の上のやりかけの…。…？

見るとそれは、『やりかけ』ではなく『終わっている』。なぜか完成している。

寝ぼけてやったのか？ いやでも…そんなはずは…。

考えても無駄なので、気にせずに学校に行くことにした。

学校から帰ると、また課題を机の上に置き、やらずに放置。

ちなみにこれも明日提出。

大丈夫！ 今度は友人にノート借りてきたから。写すだけ！

今はのんびりゲームができる。写す作業は夜でいいんだよ、夜で。

朝。目覚ましのイライラする音で起きて、俺自身の意志の弱さに、さらにイライラする。

だいたい想像がつかだろう。そう。課題、やってない。

机の上に無造作に置かれた2つのノート。

己のバカさ加減に呆れる中、軽くめくってみると…。

「あれ…やってある…」

不思議なことに、またもやってある。

いったい、何が起こってるのかサッパリわからない。

だが、やはり考えても考えても結論は出ないため、いつも通りに家を出た。

不思議な出来事の答えが出ようとしていたのは、ちょうどその日の帰り。

俺の住む家は、駅まで4分。大型スーパーまで3分。コンビニまで1分の良物件。

全部、徒歩での時間だ。

それでいて家賃は、こちら辺の相場の半額以下。

『いわく付き物件』と世間では呼ぶ。

説明はあったのだが、なんだかよく覚えていない。別に安けりやいいし。

幽霊とか、そんな非科学的なもの信じないし。

だがしかし…さすがにな…。今回のことはいったいどう説明すれば…。

とかなんとか悩んでいると降りる駅。

あとは暇になった時にでも考えるところ。

さてと、またも課題があるわけだ。当然やるわけがない。

代わりに、『君は幽霊？』と書き、机の上に放り投げた。

俺は何をしてるんだ…。そう思いつつも、消すのはめんどくさかったので、そのままにし眠りについた。

妙に寝つけない。今あのノートには返事が書かれているのだろうか

か？

気になって気になってしょうがない。

朝。目覚ましよりも先に起きた。微妙な優越感に浸りながらも、ノートを確認した。

課題はきちんと終わっている。そして、あの質問には…。

『君は幽霊？』の下に『はい』とだけ書かれていた。

そこで俺はようやく幽霊がいるのだと認識した。

学校に行き、人の話なんか耳に入らず、ただただ家のことを考えていた。

帰宅後、紙とシャープンを持ってきて机の上に置く。

紙に『君が本当に幽霊なら、今ここで、俺が見てる前で文字を書いて』

そう書いて、シャープンを置いた。

5分くらいあっただろうか。シャープンが宙に浮き、文字が書か

れる。

幽霊か何かがいることは覚悟していたが、さすがにビビる。

書かれた文は

『私は幽霊です。姿は見えません』

文字からして女っぽい文字。きれいに整った、しかしどこことなく若い感じがする。

『名前はあるの？』

『凜』

筆談は続き、リンちゃんともかなり仲良くなった。

どれくらいかというところ、「凜」を「リンちゃん」と呼べるくらいに。

年齢は13歳。死んだときの年齢だから、そのまま生きていたら今頃は…。

まあ、少女に年齢を追及するのは野暮ってもんだ。

『じゃあ俺はそろそろ寝るから。おやすみ、リンちゃん』

『おやすみなさい。また、お話してくれるとうれしいです』

お話って言っても筆談だけど、リンちゃんと話すのは楽しい。

ただ単に俺がロリコンっていうのもあるけど、生活に新鮮さや刺激が増した感じがする。

こちらからは見えないけど、向こうはどうなんだろうか。

ま、いつか。見ても見えてなくても関係ないし。

朝。目覚ましの音と、何かの痛みで飛び起きる。

頭をさすりながら、床に落ちているものを見ると、昨日使ってたシャーペン。

それも芯が出しっぱなし。

いや、まさかと思うが…。

「リンちゃん？」

机の上で、どこから出てきたのか、ボールペンが宙に浮いていた。

紙を見てみると

『じゅめんなさーい…』

…。許すっ！

こんなかわいい子が…って姿は見たことないんだけど…少し震えた文字で謝ってるだ。

俺の頭の中で、ピンク色のイメージが…。

いやいや、俺は朝から何を…。元気になるんじゃない、バカ。

出会い（後書き）

更新ペースは遅くなります。

まったりダラダラ書いていくつもりです。

その代わり、ちゃんと書いていくつもりです。

私の作品はふざけたものばかりなので。

生活（前書き）

ネタがある内はハイスピード更新。
無くなれば、それで終わり。

感想くれると作者が喜び、よりハイスピードになります。
ネタがある内は。

生活

夕方。

学校から帰ると、玄関に置いてあるメモを見つけた。

『朝はごめんなさい……。謝ろうと思ったんだけど、忙しそうだったから……』

思い出せば、今日の朝はやたらと忙しかった。

あの事件の後、友人からメールが入り、朝飯も食べずに学校に向かった。

その時にリンちゃんが何か言っていた様な気がする。

「言ってた」というよりも「書いてあった」の方が正しい。

机の上に紙が置いてあったような気がする。

今になってそのことに気が付き、急いで机の上を見た。

しかし、そこに紙は置いてなく、きれいさっぱり何もなかった。

罪悪感と後悔から、俺は紙を探し続けた。

結果から言うと、それは簡単に見つかった。ゴミ箱の中に丸めて捨ててあったから。

『ごめんなさい…。まだ痛みますか…？』

読んだ瞬間に涙があふれ出た。

少女に心配させておいて、しかもそれを無視するなんて。俺は最低の男だ。

「リンちゃん！俺の方こそごめん！朝、気付いてあげられなくて」

机のそばに立って、そう言った。すると、ゆっくりとシャーペンが動き出した。

リンちゃんはすぐ近くにいます。姿は見えないが、俺には分かる。

きっとここだ。今、俺はリンちゃんの後ろに立っているはず。

触れないリンちゃんを強く抱きしめてあげる。悪いのは俺なのだから。

『私が悪いの…ごめんなさい…』

それを見て、さらに強く優しく抱きしめてあげる。

耳元…であろうところで、そっと囁いた。

するとまたシャーペンが動き出し、紙に文字が現れる。

『私…あなたの反対側です…』

……。

あ、ああ、わかってるさ。わ、わざとに決まってるじゃないか。
ははは…。

すぐさま反対側に回り、さっきと同じように抱きしめて頭を撫でてあげる。

いるのかどうかなんてわからない。でも、それでいいじゃないか。

「もし…もし俺の靈感が強かったら、リンちゃんを見ることが出来たのかな？」

何気なく漏れた本音。

『私は…今のままが良いと思います』

「どうして？」

『…わかりません。…ごめんなさい…』

「いや、謝らなくてもいいよ」

学校から帰った服装のまま時は過ぎて、気付いたらお月様が空を照らしていた。

晩飯を買いに行くべく、再び靴を履こうとした。

残念ながら俺は料理なんてものには縁がなく、調理実習では「邪魔をしないことが仕事」と言われたほど。

俺が料理をすると、なぜが焦げる。それに色が紫やスカイブルーになる。

そんなわけで、晩飯は食べに行くか弁当を買うか。それしか選択肢がない。

で、買いに行くために靴を履きたいのだが…。

「リンちゃん？ その靴を返してくれないかな？」

いつの間にか玄関に向かったリンちゃんは、俺の靴を持って離れていく。

そして靴が落ちた場所は、玄関から一番離れた場所。

つまり…行くな、と？

いや待て、これはリンちゃんからのメッセージじゃないか？

例えば…

「ずっと私の傍にいて」とか「今日はどこにも行かせないぞ」とか。

おっと、これ以上はイケナイ領域の妄想が…。

「えっと…晩御飯を買いに行きたいんだけど…」

今度はシャーパーンが宙に浮き、文字が書かれる。

『私が晩御飯を作ったら…迷惑でしょうか？』

…これは意外だった。そっちの方向もあつたか！

リンちゃんの手料理か。悪くない…いや、非常に良い。

幽霊とはいえ、13歳の少女の手料理とか…俺だけこんなに幸せ者でいいのだろうか！

「ぜんぜん迷惑じゃないよ。作ってくれるなら、お願いしようかな」

『はい！』

しばらくすると、いい匂いが部屋を満たしてくれる。

勝手に裸エプロンで料理をしてくれるリンちゃんの姿を妄想して、俺のナニがアレなこと…。

包丁が宙に浮く光景は、ホラー映画に出てきそうな感じだったが、

運ばれてきた料理を見ると、とてもおいしそうなオムライス。

…相手は少女なんだし、やっぱり優しく言おう。

味が濃い！

決して不味いわけじゃない。俺だって濃いめの味付けは大好きだ。

だけど、これは「濃い」の範囲を超えている。

むしろ辛い。辛いを通り越して痛い。

のどの水分が全部蒸発しそうなくらい痛い。

紙には

『どうか…？ おいしいですか？』

…。

「と、とってもおいしいよ。でも、ちょっと味が濃いかな？」

『す、すいません…。私…味見ができなくて…』

…許すしかないだろ。

俺がリンちゃんに怒れるわけがない。

悪意があつてそうだった訳じゃないし、我慢すればこれくらい…。

「でも、リンちゃんが一生懸命作ってくれて嬉しいよ」

明日は休みだし、腹痛になっても大丈夫だろう。

もうすでに腹の調子に違和感を覚えているが…。

…そういえば、俺が寝るときリンちゃんはどこにいるのだろうか？

これまでずっと気にしてなかったが、幽霊も眠るのだろうか？

気になって、小声でリンちゃんを呼んでみた。

『どうしました？』

…いるんだ。すぐに反応が返ってきたということは、俺のすぐ近くにいたのか。

「いつも俺が寝るとき、リンちゃんはどっしてるの？」

『私は寝れないので、ずっとここにいますよ』

「…っていつことは…いつも俺の寝顔を見てるってこと…？」

『やっぱり…迷惑ですよ』

「いいや、そんなことはないよ。リンちゃんがそうしたいのなら、止める、なんて言わないよ」

内心、変な寝言言っていないか、激しく心配だったがどうしようもない。

NOと言えない人間なんだよ、俺は。

それに、リンちゃんに見られながら寝てると思うと…いや、なんでもない。

「おやすみ、リンちゃん」

『おやすみなさい』

生活（後書き）

予定としては5話か6話で完結。
欲を言えば、ずっと続けたい。

ロリ系は書いてて楽しいです、はい。

休日（前書き）

はい。また更新。そしてネタが尽きそう。

休日

土曜日。

まぶしい朝日と、きれいな青空が垣間見える。

こつという日は二度寝に限る。何もしないでグダグダ過ごすのが最高。

頭までスッポリと布団をかぶり、おやすみなさい。

「…リンちゃん、布団…返して」

窓とカーテンは開け放たれ、布団は俺からどんどん逃げていく。

細い目で時計を見ると、10時半。

…なんだ。まだ今日は始まったばかりじゃないか…。

頭上にはメモ帳が浮かんでいた。

『朝ですよ。起きてください』

いや、まだ朝じゃない。まだアレだから。あの、朝の前だから。

しびしびベッドから降りて、特に何をするともなく、普段着に着替えた。

今日は天気も良いし、散歩をすることだって出来る。

ずっと家の中でゴロゴロすることだって出来る。

「リンちゃんは、この家から出られるの？」

『無理…だと思います』

地縛霊。その土地に未練があり、そこから離れられない霊のこと。

つまりリンちゃんには、何か未練がある。何かやり残したことがある。…はず。

と言っても、それは俺に手伝えることなのか？

「何か、あるんだね？」

返事はない。

「まあ、無理に言えなんて言わないよ。リンちゃんの好きにしたらいいわ」

今重要なのは、この暇な一日をどう過ごすかにある。

しかし、外に出れないとなると…やる事がだいぶ限られてくる。

家にある遊び道具と言ったら、トランプくらいしかない。

さて、どうしたものか…。

そう考えていると、携帯の着信音。

また友人から。内容は、「遊びに行こう」

あいつはホントに暇人だな。バカなくらいに。

けれど、俺にはリンちゃんというかわいい少女がいるわけで。

どっちを取るかと言えば…。

『私は大丈夫です。どうぞ、ご友人と遊んでみてください』

こんな紙が目の前に現れた。

すぐに友人に返事を返す。内容は、「誰が行くか、クソ暇人」

たぶんリンちゃんは驚いているだろう。

こんな少女を家に置いて、遊びになんか行けるか。

今日は家でのおんびり過ごすとした。

が、やはりすることはない訳で…。

テレビを見ながら、何をするわけでもない。

ダラダラと時間は過ぎていき、気付けばもう晩飯。

まったく、時間が過ぎるのは早い。何かをした記憶もなく、今日一日が無くなったような感じ。

晩御飯は昨日と同じ、リンちゃんの手料理。

前回みたいな痛い料理ではなく、味見できない事を考慮すると、かなりウマイ。

休みの日なんてこんなもんだろ。

日曜日。

天気は打って変わって大雨。

昨日寝るときから、なんとなく雨音は聞こえていたが、まさかこんなに降るとは。

だが、今日は家から出なければならぬ。

行かなければ、飢え死にだ。

日曜特売。これが目的。

今まで弁当だった生活の俺には、手料理は嬉しい。

しかし同時に、冷蔵庫の中身が寂しくなっていた。

特売を逃せば、一人暮らしの身にとって大ダメージとなる。

リンちゃんには悪いが、これだけは出陣しなければならない。例え大雨の中でもだ。

きちんと声をかけ、理解してもらった上で出発する。

空から降る大量の液体の槍、地面には水たまりという地雷。

スーパーに着けば、そこはまるで戦場。

しかし！俺は負けるわけにはいかない。リンちゃんの手料理を食べるために！

戦場を離脱し、買い物終了。

戦果は上々。なかなか良い品物が格安で手に入った。

これならばらくは手料理で安定だ。

家に帰ろうとしたとき、傘立てを見た。

…俺はどうやって大雨の中、ほとんど濡れずにここまで来たのだらう。

傘も差さずにここまで来たっていうのか？

「ふっざけんな！ 誰だ俺の傘を盗んだ奴は！」

周りの主婦たちが一斉にこちらを見る。

言ってから顔を赤くする。もう遅い。

さてさて、どうやって帰ろうか…。未だ大雨だぞ、おい。

傘を買おう？

イエス。それしかないだろ…。

傘を買って、帰ろうとすると、昨日のメールの張本人が現れた。

当然のように絡まれる訳で、物凄いやる気のなさで適当な嘘を言
い…

「で、何でこうなるの？」

友人の家へのご招待されてしまった。NOと言えない人間。

家には帰りを待ってるリンちゃんがいるのに…。

そんな事を思いつつも、ついついくだらない話に花が咲く。

帰るころには雨は静まり、小雨程度。

急いで家に帰り、小声でリンちゃんを別の部屋に連れて行き、説明をする。

わかってくれたか出来ないのか、曖昧な返事が返ってくる。

『仕方ない…ですよね…』

絶対落ち込んでよ。どうしようか…。全責任は俺にあるわけ…。

「へー、なかなか良い家じゃん」

まさか、友人が俺の家に上り込んでくる展開になるとは…。

NOと言えない人間…。俺の馬鹿…。

呼んでしまったものは仕方ない。

リンちゃんには俺の寝室に隠れているように言っておいた。

とりあえず、何も起こらない事が第一。

さっさと友人を追い帰したいが、根が生えたように動かない。

そのうち、もっと呼ぼうぜ、というバカを言いだした。

さすがに腹が立った。友人の靴を外に投げ、親切にも傘も同じところ投げてあげた。

「もう大丈夫だよ、リンちゃん」

寢室の扉を開けて呼んでみると、俺の布団が不自然に盛り上がっている。

恐らくそこにいるのだろう。

布団をめくることなく、隣に座って優しく話しかけた。

しばらく布団は動かなかったが、そのうちに盛り上がりは消えた。

ベッドから降りて行ったのだろう。

「リンちゃん？ どこ？」

立ち上がって居間に戻ると、紙がこちらへやって来る。

『ずっと…一緒にいたいです』

休日（後書き）

「少女にこんな事をされたら死んでも良い！」
そんなネタを大募集です。

ロリコンさんよ、集え！

作者のやれる限りがんばります。

幽霊責め（前書き）

回避推奨。激しく回避推奨。何も言わず引き返すことを、強くお勧めします。

この性癖が苦手な人には、強烈な吐き気を催す可能性があります。十二分に注意してください。

それを気にしない勇者は、そのまま下へ。

幽霊責め

そんなこんなで十数日すぎた。

これといった進展はなく…まあ、相手が相手だから進展も何もないんだろうけど。

喧嘩するわけでもなく、激しく愛し合うこともなく。

いたって普通の恋人生活を送っていた。

そんなある日。

学校から家に帰ってくると、机の上にアレな本が出されていた。

誰だ、オカンみたいな事をする奴は…って、え…。

なぜ見つかったし！

ベッドの下は危ないと思って、クローゼットの隠し棚にしまっておいたのに！

「リンちゃん！？　リンちゃん！！」

何も持ってないのか、姿が確認できない。

居間にいないとなると、残るは寝室だけ。

扉を思い切り開けて、周囲を見渡しておかしな箇所がないか確認する。

一歩踏み出すと、何かに躓つまづいて、床と顔の距離が一気に縮まる。

床にひれ伏した俺の背中に、何か重たい痛みが走る。

それも一回ではなく断続的に。

ようやくそれが途切れたところで、姿勢を直す。

「リ、リンちゃん…？ それ、人を殴る物じゃないよ…？」

手に持っていたのは、アイロン。

それがまた上に浮いていき、俺の腹めがけて…。

『ご、ごういうのがお好きなのかと思って…』

机に置かれていた本が開かれる。

お察しの通り、男性が女性に嬲なやられている本。

この本の内容を、リンちゃんが実行してしまったわけだ。

「すみません…。俺が悪かったです…」

「またも俺に全責任がある。」

しかし、なぜ見つかった。リンちゃん存在に気付いてからは出してないはず…。

「何でこの本の場所を…。知ってたの…?」

『…はい』

考えられる要因は一つ。

存在に気付く前に、その本を出したことは何度もある。お世話になりました…ってそうじゃなくて。

その時からリンちゃんがいて、俺が気が付いてなかった。

そういうことになる。

つまり俺のナニも見られていたと…うわあああああああああああああ
あああ!!

もうお婿に行けない…。

まあでも…見られてたと思うとそれはそれで…。

それにさっきのだって、そんなにイヤじゃ…。何言ってるんだ俺

は。

『気持ち…良かったんですか？』

…。嘘を言うべきか、素直に答えるべきか。

もっとやってくれ！ とはさすがに言えないし…。

誰か、このドMを救ってくれ…。俺はどうしたらいい…？

幽霊責め…。変なジャンルに目覚めそうだ…。

「気持ち…良かった…です…」

素直な俺に…乾杯…！

明かりは夜明けまで消えることなく、男の悦びの音が響いたとかいないとか。

朝。

不眠不休。喉不調。テンション有頂天…だった。

踏まれることは出来なかったが、道具を使って責められ続けた。

包丁の背で体をなぞられるのにはゾクゾクした。

声による会話は出来なかったが、リンちゃんの書く声が俺の何かを加速させた。

動く刺さってしまいますよ。

こんな文、最高だった。

そして今。

本来は学校なのだが…行けるわけないだろ…。

『大丈夫ですか…？』

これが大丈夫な状態に見えるのなら、病院に行った方がいいだろう。

「だ、大丈夫…だけど、今日は休むよ…」

一眠りしよう…。体が持たない…。

目を覚ますと、辺りは暗かった。

下はパンツのみ。上半身裸。

こんな姿を誰かに見られてたら、もう生きていけないな。

「リンちゃん？ どこ？」

クルリと見渡すと、包丁がこっちにやってくるではないか。

「ちょ！ もう終わったから！ 続かない、ない！！！」

そう言つと、それは引き返していき、今度は紙がやってくる。

『今、晩御飯を作っていたんですが…』

…あら、そうだったの…。

べ、別に続きを望んでいたわけじゃない！

リンちゃんの料理もかなり上達してきて、下手なファミレスよりはウマい。

とはいえ、13歳の少女。そう大したものには作れない。

しかしそれで十分。むしろ年相応といった感じで、俺には嬉しい。

「ねえリンちゃん、一緒にお風呂入らない？」

欲望丸出し。それでこそ俺だ。

『え…その…そんな…』

きつと赤面してるだろう。ああ…いいな…。妄想するのは自由だからな。

「リンちゃんが嫌なら無理には言わないよ。でも、入ってくれたら嬉しいなあって」

さすが俺！ 汚い！

リンちゃんの優しさに付け込んだ、嫌らしい一言。

俺を止めることは、あんまりできない！

『でも…』

「うっん、いいんだ。無茶言っでごめんね…。俺となんて…汚いよね」

自嘲的な言い方。さあ、どうするリンちゃん！

『汚いなんて思ってませんよ』

「じゃあ…」

タオルと俺の着替えが宙に浮いて、風呂場へと飛んでいく。

俺の中で何かが崩れ去っていった。

幽霊責め（後書き）

最初はそんな気なかったのに、途中から妄想力が爆発した。

幽霊責めって新ジャンルになるかな？

もちろん次はお風呂。

過去（前書き）

お風呂も…あるよ？

一部…というか半分は友人が書いています。

過去

待ちに待ったお風呂の時間。

妄想はいつの時代でも自由なのである。

服を脱ぎ捨て、しかし、さすがに恥ずかしいので前はタオルで隠しておく。

リンちゃんにもタオルを持たせてあるので、どこにいるのかすぐにわかる。

幽霊も服を着ているのだろうか？

着てたら服が浮いてるからわかるわけで、見えないってことは…常に裸!?

「リ、リンちゃんってさ…いつも服着てるの?」

さすがに、風呂場まで紙は持ってこれない。

その代わりに、曇ったガラスに文字が出現する。

『着てるに決まってるじゃないですか。…えっち』

俺の如意棒をヒートアップさせる気かい？

風呂終了。

何にも起こらなかった。

俺の妄想力が、なぜか発動しなかった。

そういうわけで、お風呂終了。パジャマに着替えて、寝る支度をする。

「一緒に寝ようよリンちゃん」

せめてもの甘え。しかし断るリンちゃん。

俺の甘えを受け取ってくれないのか？

聞きたいが聞けない。

まるで金縛りにでもあったかのように、体の至る所が動かない。

どうしたものか…。

神は今、私めに試練を与えておられる。

だから俺は「リンちゃん」っと取りあえず一言、声に出す…。

しかし、状況は変わらず金縛りのまま…。

神は…いや、リンちゃんは、俺に何をしてもらいたいんだろうか？

そうやって、試練の内容を考えてみる。

そして出た答えが……。『俺に男になれ!』

俺は恐る恐る「愛してやる」「こう告げたのだ。

すると次第に金縛りは解け、そして自由に動けるようになる。

触れることはできなくとも、感じることはできる。

次の日の朝である。

俺たちはこの朝日が昇る時間まで話をしていた。

思い出話から、いらぬ話まで……。

俺はそこで知ったことがある。

リンちゃんが死んだ話について……である。なぜリンちゃんが死ぬ破目になったのか。

昔の話である。リンちゃんには兄がいた。

その兄はいじめられていた。

涙をいつも出ていたあの頃。時は小学時代まで遡る。

いつも靴に悪戯は当たり前、そして椅子に糊。

漫画でしか見たことがない奴がいるだろう。

しかし、兄の場合は現実にある。そして、リンちゃんの場合も…。

『蛙の子は蛙』

それは兄妹とて同じ。いじめられっ子の妹はいじめられっ子である。

好き嫌いなど関係ない。ただ何となくいじめるのである。

そのいじめが原因で学校に行かなくなったリンちゃん。

それを気遣う事による、リンちゃんのお兄ちゃんの衰弱死。

さらにその負の連鎖は、兄の彼女の逆恨みにまで発展する。

なにを大げさにというかもしれない。しかし、時として世界は不条理である。

逆恨みの念を持った彼女は、リンちゃんの家を押しかける。

そこで、彼氏を死なせる原因を作った妹を殺した。

現実にハッピーエンドなんてものは、ほとんど存在しない。

しかし、それが世の中というものである。

俺はこの話を聞いて、一層リンちゃんの事を愛そうと誓った。

その日の夜。

俺はもう一度、リンちゃんをお風呂に誘った。

やましい気持ちはない。

ただ純粹にリンちゃんと一緒にいる時間を長く作りたかった。

死んだ兄の代わりになろうと、心のどこかで思っていたのかも
しれない。

風呂に入っても、気まずい空気が漂い続ける。

なんとか換気しようと必死になるが、どんな言葉を投げかけて
いか見当もつかない。

言って良かったのか悪かったのか。

リンちゃんの過去を聞いた時から、これが頭から離れなかった。

「沙都子と悟史みたいだね」

妹を思いやる兄。いじめられる兄妹。そのために消える兄。

被りすぎていた。

たぶん言っではいけなかったと思うが、俺の心は少しだけスッキリした。

風呂から上がれば、何をするわけでもなく。

しかし、重い空気は継続していた。

いつも通りに振る舞っているつもりでも、どこかで憐れんでしま
う。

けっきょく俺にはどうしようもできないのだ。

早めのおやすみを言い、視界を閉じた。

辺りはまだ暗かった。

顔を叩かれるような感覚に起こされた。

「リンちゃん勘弁してよ…。朝から学校なんだから…」

枕元に置いてあるメモ帳を見ると、眠気が吹き飛ぶような内容だった。

『一緒に…寝てください…』

ついにリンちゃんからの甘い誘惑が訪れた。

場所を空け、布団をめくってあげる。

すると、急に爆音が…。

「…そういつことね」

朝。カーテンから差し込む光は眩しく、目覚ましは鳴り響く。

どつせそんなことだろうと思った…。

今日の名言。夢オチとは、非常に虚しいものである。

ん？ この時計…おかしくないか？

長い針さんは55分を指している。短い針さんは8を指していた。

あー…そういこと…。

朝飯も食べずに、寝起きダツシユ。

リンちゃんには、簡単に説明して学校へと向かった。

『夢じゃ…ないですよ。…一緒にいたかったから…』

過去（後書き）

もうネタが尽きました（笑）

ラストは3パターン考えているので、全部書きます。
つまり、最低でもあと3つ書きます。

追記

「おい、ちょっと意味わかんねえぞ。ちゃんと書けよ」との指摘を受けたので、加筆しました。
作者のやる気のなさの問題です。すみませんでした。

幸福（前書き）

ハッピーエンド。

友人Kに頼んで書きあげてもらいました。感謝！

幸福

学校帰りに、あるものを買って帰る。

その名も、ネコ耳カチューシャ！

べ、別に俺の趣味ってわけじゃないからな！

これがあれば、リンちゃんの居場所がすぐにわかるってことだ！

だから決して俺の趣味なんかじゃない！

と、会計の時にブツブツ言っていた。

たぶん周りには聞こえてない。そう思いたい。

例の物が入った袋を持ちながら、街中を歩いて帰る。

リンちゃんのため、リンちゃんのため…。

自分を正当化しながら家へと辿り着いた。

「ただいま、リンちゃん！ プレゼントだよ！」

慌ただしく靴を脱いで、机の上に物が入った袋を置く。

それが宙に浮くと、中からあれが取りされる。

『なんですか…コレ』

「ネコ耳カチューシャだよ」

何とか説得して、カチューシャを付けてもらった。

想像とはちょっと違うが…。

ポルターガイストみたいな感じになってしまった。

ま、どうでもいいや。

そんなこんなで、ようやく妄想の世界に浸れる。

とは言ったものの…暇でしようがない…。

妄想？ ふざけんな。

「リンちゃんは何がしたい？」

『私は、一緒に寝てほしいです』

震える声で、そつと言つ。

「そうか…」

俺は深く聞かないようにして、傍でリンちゃんを感じることにした。

たぶん理由なんてないんだ。ただ、傍にいてほしい。

それだけのことなんだろう。

俺はそう自分に言い聞かせた。

つらいのは、理由を聞けない俺なんかじゃあない…。

成仏できないほどの過去を持つ、リンちゃんの方がつらいんだ…。

俺はそう理解した。

しばらくして目を覚ますと、なんだか台所の方から音が聞こえてきた…。

ガシャン・ガシャン…。

いつもと変わらない様子で、リンちゃんは料理をしていた。

今日のメニューはオムレツである。

卵を上手にひっくり返すリンちゃん。

前の時より、格段に上手になっていくリンちゃん。

もはや、俺とは天と地の差。いや、太陽と冥王星くらいの差がついてしまった。

それでも、リンちゃんの作る料理が食べれるのだから、大して気にしてないと言えば気にはしていない。

リンちゃん手作りのお弁当を俺は学校へ向かった。

いや、向かおうと思った。

しかしそこには、いつもと違う状況が一つあった。

リンちゃんが付いて来ている。

なぜ付いて来ているのだろうか？

しかし、そんなこと直接本人から聞けない。

さてどうしたものだろうか？

俺はとぼとぼと歩いてそのことを考えることにした。

しかし、まともな答えが出る前に、学校についてしまった。

一限の数学。

俺は、理系という概念が間まったくない男であり、今日もこの前もそのまた前もさっぱりわからずじまいのまま現在進行中である。

二限の国語。

確かに俺には理系の概念などない。

かっと言って、国語ができるわけでもない…。

少し文章が読め、普通よりは漢字が読めるってなだけだった。

三限の英語。

もうここまでこれば言うまでもないと思うが、あえて言うておう。

俺は日本人である。だから外国語なんて知らない。

それが俺の答えだった。

四限の体育。

腹が減っては戦はできぬ。

そんなこんなで、疲れ果て…。

やっとの思いで飯にありつく。

クラスの注目である愛妻弁当。

いままで買い弁や買い弁や買い弁だった俺の飯が、何か不器用ながらもしっかり作ってある弁当に変われば、「怪しい」っと思わない人間がいるだろうか？

いや、いるはずがない。

だからこそクラスの注目が俺の弁当に集まるわけで…。

俺に「その弁当は誰が作っているんだ？」っとの質問が殺到する。

俺はその戦いを気合で乗り切り、リンちゃんを屋上に連れ出した。

「リンちゃんのお弁当のおかげで、クラス中大騒ぎだったね…」

正直、あれが毎回続くとなると、それはもう大変なことに…。

けれど…。

「これからも作ってくれよな」

これは今の俺が発することのできる精一杯の言葉だった。

その返事に、屋上のどこからか集まってきた砂が動いた。

『了解です』

そんな言葉が聞こえるような気がする。

これからもリンちゃんの傍にいらることができる。

お兄ちゃんにはなれないが、お兄ちゃんの代わりとしてなら…。

俺はそんなことを思いながら、「教室に帰ろっか？」と声をかけた。

階段を下り教室に入りかけた俺の腕を、誰かがグイッと引っ張った。

それは『幽霊の』リンちゃんが最後に取った行動であり、『さよなら』を意味する行動だった。

俺は気持ちの整理をつけるのに少しだけ…2週間ほどかかった。

もう今は『幽霊の』リンちゃんがない事が当たり前の生活になっ
てしまった。

まさか、幽霊のリンちゃんが肉体を持てるなんて…。

悲しくはない。寂しくもない。

このいわく付き物件に、実在するリンちゃんと2人で生活できる
のだから。

俺は、夏鈴^{かりん}との気持ちを抱きながら前に進むことを決意した。

幸福（後書き）

補足。

消えたのは『幽霊の』リンちゃん。

夏鈴というのは、肉体を得たリンちゃんのこと。

学校の屋上で、愛の力によりリンちゃんは肉体をもらった。

夏鈴＝リンちゃん

そういうことで解釈して欲しいです。

次はバッドエンドを載せます。

いわく付き物件（前書き）

バッドエンドバージョンです

いわく付き物件

今日はリンちゃんにプレゼントを買ってあげようかと思っている。
そんな訳で、俺は今その店屋にいる。

これならいつでもリンちゃんの姿を見れるってわけだ。

俺天才！

さて、ネコ耳カチューシャも買ったし、帰りますか。

急いで家へと帰る。

「リンちゃん、ただいま。プレゼント買ってきたよ」

反応はない。まあ、反応も何も声は聞こえないんだからな。

とりあえず買ってきた物を机に置き、袋から出すように言ってみる。

がしかし、やはり反応はない。

「リンちゃん…？ か、かくれんぼのつもりかい？」

ある程度、わかってはいた…。でもそれを認めるわけにはいかなかった。

台所、風呂場、寝室。家中全部探した。

家から出れないリンちゃんが、外にいるわけがない。

どこに…どこに行ったんだよ…。出てきてくれよ！

血眼になって探したかった。でもどこを探せっていうんだよ。

足の力が一度に無くなり、その場に倒れこむ。

そのまましばらく動けなかった。気が付けば、外は暗くなっていた。

「戻って来てくれよ…リンちゃん…」

呼んでも戻ってこないことはわかっていた。

でも、呼ばずにはいられなかった。

夜も明け、空は明るさを取り戻していた。

足に力は入らないはずなのに、俺は外を歩いていた。

行く当てはない。

リンちゃんの気配を感じたかったのかもしれない。

交番の前を通った時、警官に呼び止められた。

ヤク中の人とでも間違われたのだろう。

そんなに俺は死んだ顔をしているのか。そんなに俺は…。

事情を言っても信じてくれるわけがないので、適当な嘘をついた。

すると警官は、家に帰れと言う。

…リンちゃんのない家に帰ったって…。

言われるがまま、俺は家へと歩を進めた。

静まり返った家の中。

振り向けば、そこには紙切れが浮かんでいるよう。

ふと見た下駄箱。

見慣れたメモ帳が置いてあった。

そこには、たった一言。

『おわかれのじかんです』

認めたくなかった。認めることなんて出来なかった。
目の前が真っ暗になったのは、これが初めてだった。
急に視野が狭まったと思うと、意識まで持って行かれた。

寝すぎると、リンちゃんが起こしてくれる。

そう、甘い考えを持っていた。

寝て起きれば、リンちゃんがいる。

そんな甘い現実を望んでいた。

ハッピーエンドなんて存在しない。

現実はいつだって冷酷だから。

むしろ、今までがおかしかったのかもしれない。

幽霊との生活なんて。どう考えたっておかしかった。

でも、それは現実だった。その現実が甘すぎたんだ。

これで普通の生活に戻る。一番幸せなことじゃないか。

おいしい手料理もない。楽しい会話もない。

冗談を言っつて、困らせて笑いあうこともない。

ようやく…現実に戻れたんだ…。

あれから2年が過ぎた。

あの時のことは、今でもしっかりと覚えている。

同い年の彼女もできて、不満のない生活を送っていた。

偶然か必然か。それとも、あの子の仕業なのか。

彼女の名前は『夏鈴^{かりん}』

元気ハツラツ。いつも周りを明るく照らしているような存在。

「リンちゃん、今日はどこ行く？」

もちろん、彼女のごとは『リンちゃん』と呼ばせてもらっている。彼女がいなかったら、俺はきっと立ち直れなかっただろう。

「私、あなたの家に行きたい！」

…俺の家か。ま、いいだろう。掃除はしてないから、驚くだろうな。悪い意味で。

玄関を開けると、あの時と変わらないまま。

下駄箱の上のメモ帳は、一番上の部分だけ破られ、真っ白の状態。

あの子が使っていたシャーペンも、机の上に置いてある。

心の中で、いつか戻って来るんじゃないかと思っていたから。

戻ってきたら、三人で生活しようと思って。

「えへへー。おじゃまします」

ちなみに、彼女を俺の家に呼ぶのは初めて。

今までは、何かと理由を付けて断ってきた。そんなに長く付き合ってるわけでもないし。

それに、あの子のことも話してはいない。

どうせ信じてはくれないだろうと、一人で決めてかかっていた。

しかし今日、踏ん切りがついた。

あの子と生活していたこの場所で、打ち明けようと思う。

彼女を居間へと案内し、机にお茶を出す。

そしてついに話を…。

「あれ？ このシャープペン、見覚えがあるような…」

…？ いやいやまさか。このシャープペンは、どこにでも売ってるものだし。

見覚えがあるのも当然だろう。

「それに、初めて来たとは思えないような…」

…いやいや…嘘でしょ？ リンちゃんの訳がない…。

だってリンちゃんはあの時…。

「リンちゃん…？」

声は無意識に出ていた。

「何？」

「あ、いや……。そつちじゃなくて……。順を追って話すよ」

幽霊少女との生活、幽霊少女との別れ。全部話した。

最初は信じてくれなかったが、俺のあまりの真剣さに気付いてのか、茶化さずに聞いてくれた。

もしかしたら、彼女はリンちゃんの生まれ変わりじゃないかと、話しているうちに思えてきた。

それなら一層、彼女を大事にしようと思った。

もう二度と、リンちゃんを手放さないために。

そこで俺の意識は、ようやく戻ってきた。

玄関の段差を枕にするように寝ていたらしい。

目の前には下駄箱が大きく見えた。辺りは暗かった。

自分でも言ったじゃないか…。現実には冷酷だった…。

立ち上がる気力もなく、再び目を閉じた。

もういつそのこと死んでしまおうか。

夢の世界で生きられるなら、こんな冷たい現実の世界で生きるよりマシなのではないか。

運が良ければリンちゃんに会えるかもしれない。

俺は台所へと足を動かした。

リンちゃんがいつも使っていた包丁を手に取った。

「リンちゃん…会いたいよ」

その家は再び『いわく付き物件』となった。

いわく付き物件（後書き）

補足… いらない？

まあ、最後は主人公がアレしたということ。

次はヤンデレエンドを書く予定です。

ただし予定に変更は付き物です。

少女は空に飛び、男性もまた飛んだ（前書き）

ヤンデレエンド…を書いていたはずなのに。

どろどろになった！

少女は空に飛び、男性もまた飛んだ

今日はリンちゃんにお土産。

その名も「リボン付きカチューシャ」

鏡 リンがつけてるのと同じような物。

急いで家に帰ろうとして人にぶつかったが、無視して帰った。

今の俺は誰にも止められないのさ！

家に到着。

すぐを買ってきたものを机に置き、リンちゃんを呼ぶ。

『えつと…』

どつやら喜んでくれているようだ。

さっそくそれを着けさせ、嫌がって様な気もするが、かわいかったので気にしない。

無理言っつて、そのままの姿で晩御飯を作らせる。

ネコ耳＋エプロン。姿は見えないけれど、十分妄想で補える。

食材を切る音がリズム良く聞こえ、眠気を加速させる。

テンションを上げ過ぎたのだろう。次第にまぶたが重くなってくる。

俺「リンちゃん、ご飯出来たら起こしてね」

晩飯が出来るまで一眠り。すぐに意識が持っていかれる。

ここは…学校…？　なんで俺は学校にいるんだ？

周りは真っ暗なのに、赤い月があたりを照らしている。

人っ子一人いない。歪んだ世界で地面につずくまってる俺。

動こうと思っても、金縛りのようになっていて動けない。

だんだんと気温が上がり、汗が滲み出てくる。

世界は赤一色になり、地面が溶けていく。

ゆっくりと落下していくと、温度がさらに上がる。それにしたがって、押しつぶされるような威圧感。

ハッと目が覚める。

そこは確かに俺の家で、至って変わらない日常……。至って変わらな……。

目の前に広がるのは、湯気を立てる美味そうな料理と、いくつもの火のついた蠟燭。

起き上がるうとしたが、両手両足を縛られ、いつも通りには起き上がれない。

若干苦勞しながら起き上がると、包丁がこちらにゆっくり漂ってくる。

俺「リンちゃん……？　これは……どういうことかな……？」

包丁はなおも漂い、俺の近くになっても速度は変わらない。

身の危険を感じ、すぐに伏せる。

俺の頭上で包丁が止まる。

次は紙が俺の頭上で止まる。

『動かないでください』

俺「いや…動かないでくださいって…動けないんだけど…」

『口答えもしないでください』

俺「えっ？」

包丁が下に落ちてきて、目と鼻の先で止まる。

どうやらリンちゃんは本気らしい。でもなんで…こんな風に…。
俺、何かした？

考えても原因はわからず、むしゃくしゃしてくる。

俺「ごめんリンちゃん。俺、何か…」

言い終わらない内に、口に温かい物がつっこまれる。

これは…晩飯？

目の前で包丁と箸が浮かんでいる。

もう訳が分からない。つまりあれか。デレか。

…そうか！今日はツンデレプレイなのか！

俺「ビックリしたなあ、もう。そういう事なら先に言ってくれれば……」

「またも包丁がやってくる。」

しかし今度は、腕を軽く擦っていった。

赤い線が入り、血が浮かんでくる。

これは…マジなの…？　そういうプレイじゃないの…？

食べ終わると、椅子に座るように言われる。

椅子と俺の体が、ガムテープでグルグルと固められる。

足と腕も同様に固められる。

そしていつも通り、紙が浮かんでくる。

『私の物なんです』

支配欲かよ…。この状況はマズイ…やられる…。

包丁の背で首筋を撫でられる。

冷たい感覚が、俺の中を走り抜ける。

『逃がしませんよ…』

朝日が昇り、窓の隙間から太陽の光が射しこんでくる。

今もなお包丁は目の前を浮遊している。

俺の体は刃向う度に傷つけられ、全身にみみず腫れや出血を起している。

一睡も許されず、椅子の下にはたくさんの紙切れが落ちている。

『朝ごはん、作りますね。私の愛を余すことなく受け取ってください』

台所に飛んで行った包丁は、何秒か毎にこちらを向く。

じつぱらくすすむと、2つの目がこちらに漂ってくる。

『おめ、食べてください』

口を開ける元気さえない。

それを見かねたのか、皿に乗った料理がスプーンでちょうど1口分、俺の口の中へと乱暴に突っ込まれた。

突然入り込んだ物を吐き出すと、すぐに刃物が飛んでくる。

足に1本の赤いラインが刻まれる。

痛みに呻く元気もなく、声にならない音が口から漏れる。

何度もそれは繰り返され、口の周りは涎や食べ物で汚れ、閉じることはしなくなっていた。

何時間過ぎただろうか。

増えていく傷と紙切れ。

どこを見ても焦点が合わない目。感覚が無くなった腕と脚。

『そんなに見つめて。もっと愛してくださいよ』

刺激するように包丁で傷をつけられる。

そのうちに意識も薄れ、目を開く力さえ無くなった。

息をするだけで精一杯。

最後に見た光景は、俺の腕の骨が見えるシーンだった。

痛みはない。

視界を失った今、リンちゃんと会話する手段が断たれた。

それでも紙に文字を書く音が聞き取れた。

数日後。

とある家で、椅子に縛られた男性の死体が見つかった。

男性は首から上が刃物のようなもので切り取られていた。

脚には複数の傷。左腕は骨がむき出しの状態。

椅子の下には大量の紙。

男性の頭は、未だ見つかっていない。

このニュースは世間に広く知れ渡った。

そんな世の中をはるか上空から見ている、1人の少女と1つの頭があった。

少女は空に飛び、男性もまた飛んだ（後書き）

書いた本人も、どこを間違えたのかわからない。
何でこうなった…。

ヤンデレはヤンデレ視点で書くのは楽だけど、ヤンデレの被害者視
点で書くのは難しい。
今回で身に染みた。

これからは、ヤンデレ視点で書いていこう。
例えばリンちゃん視点とか…。
いや、何でもない。

ちなみにタイトルは、GOSICK風味にしたかっただけで、深い
意味はないです。

何気ない日常（前書き）

特別企画というわけで、特別バージョンです。
ただし、オチは無いです。

何が特別か知りたい方は、後書きにて。

何気ない日常

今日はリンちゃんへのプレゼント。

少ない金で買ってきたネコ耳カチューシャ。

妄想を楽しむため…じゃなくて、リンちゃんを喜ばせるため。

天にも昇るような足取りで、リンちゃんが待つ自宅へと帰る。

周りから見たら変人なのだろうが、今はそんなこと関係ない。

家に着いて、にやけ顔でドアを開ける。

乱雑に靴を脱いで、慌ただしく居間へと向かう。

すると一枚の紙が浮かんでくる。

『どうしたんですか？ そんなに慌ただしく』

「リンちゃんにプレゼントだよ！」

リンちゃんという言葉を見殺しして、買ってきたネコ耳カチューシャを机に置く。

満面の笑みの俺。動くシャーペン。

『これは…?』

「プレゼント！ つけてみてよ」

ゆっくりとそれは宙に浮き、ある一定の高さで止まる。

それはつまり、装着してくれた証。

「とってもかわいいよ、リンちゃん」

さっそく妄想。即脳内補完。

きつと恥ずかしかがって顔を赤くしてるんだらう。

そういつリンちゃんも、たまらなくかわいい。

すっかり顔の筋肉が緩んでいるところに、再び紙が飛んでくる。

『これつけながらご飯の準備するんですか…?』

その発想はなかった！

「ぜひともお願いしたい」

ネコ耳は台所へと飛んでいき、包丁が浮かぶ。

ここから見てみると、最高の光景が映る。

少女の料理姿。それもネコ耳。

妄想には十分すぎる姿。

俺もゆっくりと立ち上がると、台所へと向かう。

ネコ耳の後ろに立って、眺める。

リンちゃんもそれに気が付いたのだろう、包丁がこちらに向く。

一瞬、背筋がゾクツとしたが、それは快感へと変換される。

特に変わったことは無く、晩御飯の完成。

『さっきはどうしたんですか?』

「いや、ちょっとね。リンちゃんを近くで見つめたいなって」

今日は俺が主導権を得る。

リンちゃんの顔を赤くさせていく。

食事を食べ終わると、例のネコ耳が俺の近くへと擦り寄ってくる。

『今日は…ズルいですよ…』

カチューシャが俺の腕に触れそうなくらいに近寄ってくる。

そつと手を伸ばし、頭であるところを撫でてあげる。

リンちゃんの方から甘えてくるなんて、とは思ったが、素直に受け取っておく。

本格的に猫属性でも加わったのか？

そんなデレデレ状態のリンちゃんを撫でながら、時間は過ぎていった。

お風呂にも入り、パジャマに着替える。

風呂でもカチューシャが浮いていたような気がしなくてもない。

まあ、そこら辺はよく覚えてないです、はい。

布団に潜ろうとしたところで、リンちゃんを呼んでみる。

すぐに紙は飛んでくる。

『呼びましたか？』

ああ、呼んだともさ。これからする、あることのためにね。

「リンちゃんさ、寝なくても平気なんだよね？」

『そうですね...？』

よしよし、まだ気付いてない。

「じゃあさ、今日はずっと起きてようよ」

俺の考え。

それは、リンちゃんとのオールナイトフィーバー。

寝ずに、ずっと起きて、あんな事やこんな事やそんな事を…。

『でも、明日は学校なんじゃ…』

「大丈夫、休むから！」

リンちゃんと一緒にいられるなら、学校なんて休む。

その後も俺の心配してくれたが、そうやって話しているうちに朝はやってきた。

眠気は驚くほどに無く、むしろ充実感でいっぱいだった。

何を話したわけでもない。

からかい合ったり、リンちゃんをちょこっと困らせてみたり。

逆に困らされたり。

いつもとは違ったリンちゃんの1面を見ることが出来たような気がした。

今ネコ耳さんは、台所で朝飯の準備中。

邪魔にならないよう、俺は待機。

幽霊がいることは変わっているが、俺にはそれが普通。

リンちゃんがいる。だからこの生活がある。

一般常識から少し外れた生活。

誰にも信じてはもらえないが、それでもいい。

2人で楽しく、笑いあって暮らしている。

台所から俺を呼ぶ、1人の少女の声がした。

何気ない日常（後書き）

ちよつと短かったか？ まあ、いいや。

特別企画。

それは、作者年齢1才。今日が作者としての誕生日です。小説を上げ始めて1年。これからもがんばっていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4233s/>

いわく付き物件の幽霊

2011年6月17日15時08分発行